デザインで伝えるメッセージ11
～建築による新旧の融合 ブルス・ド・コメルス-ピノー・コレクション～

渡邉知子国際特許事務所　代表
弁理士　渡邉知子

久しぶりに訪れたパリでは、コロナ禍に新たなスポットが幾つも誕生していた。その中で今回は、日本人建築家によるリノベーション建築を紹介する。2021年5月にオープンしたのは、現代アートの美術館「ブルス・ド・コメルス-ピノー・コレクション*」だ。この建物は、最初はカトリーヌ・ド・メディシスの宮殿として16世紀に建造され、その後、現存する塔を残して解体された。18世紀に入り穀物取引場が造られ、19世紀には商品取引所（ブルス・ド・コメルス）として使われた長い歴史を持つ。そして美術館として再生させたのは、現代アートのコレクターとして名高い実業家のフランソワ・ピノー氏だ。ピノー氏は、既に幾つかのプロジェクトを共に成功させた経験のある、安藤忠雄氏に設計を依頼。安藤氏のコンクリート建築が、この歴史的建造物をどのように美術館として再生させるのか、個性の強い安藤氏の建築とパリの長い歴史がどの様に融合するのか、難題の答えを見つけるため、パリの新たな美術館を訪れた。

建物の外観は、屋根がドーム状に膨らんだ円柱形だ。建物内に入ると、高さ9メートル、直径25メートルの巨大なコンクリートで出来たシリンダー(円筒)がそびえ立っていた。つまり、巨大な円柱の中に巨大なシリンダーが収まっているイメージだ。シリンダーには中と外を行き来するための開口部が設けられ、中はメインギャラリーになっている。この開口部から漏れる陽の光に導かれて中へ入ると、メインギャラリーは光に満ちていた。上を見上げると、ガラスのドームで覆われた天井からの光が、シリンダー内に異空間を創り上げていた。ドームを囲んで円周状に描かれたフレスコ画が落ち着いた色彩を放っている。136年前のパリ万博の際に、5人の画家によって描かれたものだ。その下には回廊が円周状に設けられ、バルコニーの手摺りには複数の鷹や鳩が停まっている。一見本物の様に見えるが、これらも作品（マウリツィオ・カテラン作）だ。その下に、無機質なコンクリートのシリンダーが壁を形成している。シリンダーの開口部からは、建物の歴史的な装飾や調度品が垣間見える。天井からさす光がコンクリートの壁面に美しい陰影を作っている。歴史的建造物の中の異空間は、時間軸を超越してアート作品が共鳴し合う展示空間となっていた。ピノー氏は、彼のコレクション展示のための新たな空間に、新旧の対立と出合いを求め、安藤氏がそれに応えた。シリンダーの外側には階段があり、3フロアに分かれる展示室へ繋がっている。各展示室のコレクションも秀逸だった。

美術館の外観

メインギャラリー

手摺りに停まっている鷹と鳩のアート作品

この美術館は、ルーブル美術館とポンピドゥセンターの間にあるパリの中心、レ・アール地区にある。美術館としての再生は、建物を所有するパリ市からの提案をピノー氏が受けて実現した。建物はパリ市から50年間貸与される。好立地に位置する歴史的建造物を、現代アートの美術館へ変貌させる提案を行なったパリ市。安藤氏のコンクリート建築に反対の声もあったようだが、新旧の融合を図りながら着実に未来を見据えて進化を続けるパリ。神宮の杜の再開発で揉めている東京都が思い出された。優れた人材を活かす、政治や行政の手腕が問われる。

＊Bourse de Commerce-Pinault Collection